

分教場の跡を訪ねて その(二)

宇目町小野市小学校 真弓分校

高司 良恵

(会員・佐伯市宇山区)

小野市から、国道三二六号線を南下し宇目町のシンボル「唄げんか橋」を渡り右折、曲がりくねった山道は、程よく補装整備されている。

しばらく行くと「柳瀬」に入る。数軒の家が静かなたずまいを見せ、氏神の大樹が、なぜか郷愁を誘う。

教員駆出しの頃、友人が小野市小学校に転勤になり、勤務先は「真弓分校」だった。その時、始めて知った「真弓分校」なんと美しいひびきの分校名ではないかと思った。だが友人はなぜか淋しさを含んで涙ぐんでいた。

あれから、五十年近くの月日が流れたが今その「真弓分校」に向かって車を走らせている。「まだか まだか」未知の土地を尋ねる不安と期待、対向車もなく人影すら見あたらない。



集 落 の 全 景

およそ三キロ位走ったであろうか。小さな道しるべに「真弓」と書いているのが目に入った。「ああ もうすぐだ」安堵となぜかなつかしさが、こみ上げてくる。「ここだ。着いたぞ。」と車から降りる。すきとおった空の青さに向かつて、思わず叫んでしまった。

山峡に抱かれるように、右手にまばらに家々が・・・田んぼが一面に見える。小高い丘に大きな屋根が、「分

校はあそこだ」とすぐわかった。

車を山側に置き、分校を目指して地区に入って行く。息はずませながら、急坂な路地を歩く。向うから見知らぬおじいさんが、近寄って来る。「どこか

らきたんなあー」「なんしに来たんなあー」と、人なつかしげに話し掛けてくる。

「昔はなあー営林署関係や山仕事の人達で子どもも多く四十人近くもおったことが、あつたんじゃあ。にぎやかでのうー。今は空き家も多く、人もおらんごとなつてのうー。」と話してくれた。

分校に着いた。//無残だ!!巧ち果てた分校の様を目の前にして、胸が押しつまり声も出なかった。あの美しい「真弓分校」のイメージがいっぺんにふきとんでしまった。

草木は繁り大屋根は破れ惨憺たる荒れ放題草をかきわけ、やっと校舎内に入ることができた。一步一步床板を確かめながら、教室の中程まで行つた。教室は二つに仕切られる様になつていて集会によつては、ひとつに開放できる仕組みになつていた。

天井、教室のあちこちには、色褪せた教材の展示物が残つていた。分校の先生と子ども達の授業風景が浮かんでくる。不便な土地で分校教育に情熱を注いだ、同僚、仲間、先輩諸氏の面影が、走馬燈の様に荒れ果てた校舎内を駆け廻る。胸があつくなつた。

運動場に出てみる。広い運動

場は、昔のままで遊具や雲梯うんてい、鉄棒、足洗い場が残つていた。

子ども達の喜々とした姿、鬼ごっこ、運動会、リレー会と子ども達をのびのび

と逞しく育んでくれた運動場。

山から吹きおろす風が肌を素通りして校舎の方へと吹き抜けていく。

「公民館にすればよかったのに……」「使う人もおらん。維持費が大変でのうー」と、おじいさんは言う。「もう近々「台風」でもくれば崩れ落ちるのうー。」とひと言 未練を含めながらつぶやいた。

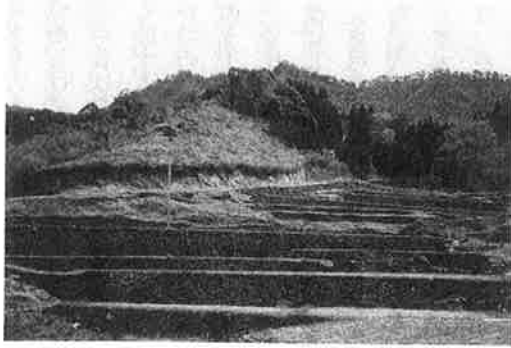
ふと山側に目を向ける。「あつ」と心がゆれる。それ



真 弓 分 校

は棚田の石垣の風景だった。「うわあ!!すごい」という外はない。まさに絶景!!自然環境のきびしさに順応して暮らしていく営みの工夫とその努力に立ちすくんでしまった。

だがその棚田も休耕田が多く放置されているのが、残念であった。美しい峡の水音が聞こえて来る。風化された無縁墓に思わず合掌再び分校を見かえる。



見事に整備された棚田の石垣

分校の歴史の
終末は淋しい。
「真弓分校」と
いう憧れにも似
た感傷のイメー
ジも押し寄せる
時代の波には、
どうすることも
出来ない。平成
七年の国勢調査
によると、四世
帯九人という現
状である。

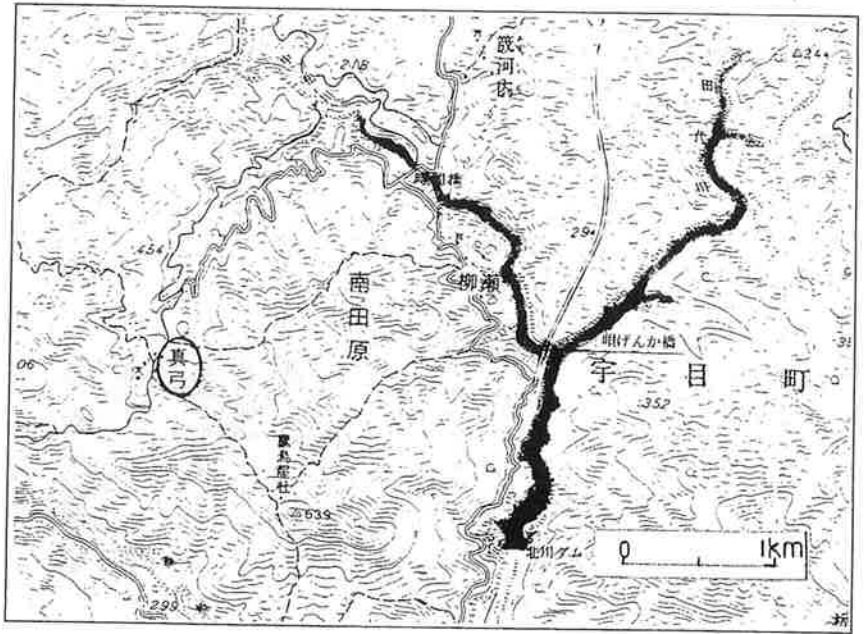


路傍に残る無縁墓地

真弓分校沿革

- 明治四十二年七月 田原分教場を柳瀬に移転し柳瀬分教場開設
- 大正九年十月 柳瀬分教場を真弓に移転
- 昭和三十五年十月 真弓分校新築
- 昭和四十五年三月 真弓分校廃校

※宇目町誌より



宇目町重岡小学校 大原分校

大原分校沿革

- ・明治八年四月一日 大原分校開校 学校位置「大原村地蔵堂」 就学率は極めて低い。その原因として住民にとつて子弟を教育するための経済的余裕がなかった。従来からの慣習で農民には、教育など必要がないといった考え方が一般的であった。就学率も十人前後で就学者はすべて男子であった。
- ・明治十年四月 西南戦争勃発により四月から十一月まで全校休校となる。
- ・明治十九年六月 小学校を簡易科に改められ重岡簡易学校大原分校となる
- ・明治二十五年四月 大原分校を廃止して本校に統合した
- ・明治二十九年一月 大原地区通学不便解消のため再び大原分教場を設置。
- ・昭和二十八年六月 大原分校新築落成 木造平屋建 一六一平方メートル

- 昭和四十五年三月 大原分校廃校
- 平成七年度 大原地区より現在十二名の児童が重岡小学校にバス通学をしている。

佐伯―弥生―直川―宇目へと、国道十号線を南下する。「宇目ドライブイン」を下ると右側のやや奥まった所に「大原分校」跡が、はっきり確認できる。十号線から校门までは三〇メートル位だろうか。門柱も残っている。運動場には記念樹と思われるセンダンの大樹が四・五

本 大きな影を落としていた。

かぎ形の平屋の校舎内外は、よく整備され まだまだ「大原分校」跡は健在……………とてもうれしく思った。

運動場に居あわせた地区の方と一問一答

●大原分校の御出身ですか。

▲わしらの頃は、生徒も多く活気もあって、とてもにぎやかだった。

●いつ頃できましたか。

▲はじめは、地元の神主さんが教えていた。

●子どもの多い頃の様子は

▲重岡駅の開通により、鉄道関係・営林署・諸官庁関係

の子弟が多く町も大変栄えて、にぎやかだった。重岡駅から木材・木炭・鉱石・椎茸などの産物の輸送、また、旅客扱いも出来たので人の往来も盛んであった。

●先生方は……………

▲佐伯から汽車通勤をしたり、下宿をしていた。地元出身の先生もいた。

●分校跡は今 何に使っていますか。

▲公民館として地区の集会に使っている。

平屋の本館から渡り廊下で、便所に行かれるし屋根も柱もまだしっかりしている。校舎内は地区の人の利用が多いのか、よく整理され管理が行き届いている。

利用される方は、分校出身の方も多いのではないかと思うが、みんなそれぞれ愛着一人の思いを抱いているにちがいない。

そして校舎のあちこちに残る思い出の落書き、傷跡……

……………などなど集まれば昔話が、はずむことだろう。陣取り遊びでそれぞれ組の陣に構えたであろうセンダンの木、その陣を守るため必死になってしがみついた友垣のぬくもり、残された低鉄棒もまだまだ使える。

人が住み町があり、歴史を語る分校跡に集う地区民にとっては、何よりの心のよりどころとなっているのではないかと思う。

久方振りに我が里に帰郷し分校跡に佇む人も多いのではないだろうか。そして、ふっとよぎる幼き日のあれこれ、ふるさとのぬくもりは再び旅立つ人にとって心の慰めとなりはげましにもなると思う。これからも分校跡は忘れ難き存在として、いつまでも残しておきたいと念じて止まない。

ふり返る分校に明るい午後の日ざしがいつばい ふりそそいでいた。



大原分校

